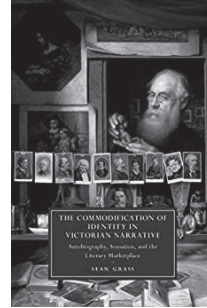


書 評

Sean Grass, *The Commodification of Identity in Victorian Narrative: Autobiography, Sensation, and the Literary Marketplace*

(Cambridge: Cambridge University Press, 2019)

宮丸 裕二



ある時代以降、人間の情報を商品化して、それを対価と交換で流通させているものが文学なのであると、本書の筆者は言う。書く人が自身に関する情報を切り売りして成立させているのが、19世紀以降の文学の大きな特徴でありつつ、この時代以降の文学にはどれにもこのことが必須の要素として備わっていると言う。それは世にも珍しい経験をした人が自身の体験談を綴った書物がそうであり、特殊な世界を垣間見たセレブが自分の人生を綴る際にそうであるし、また、法外な対価を見込んで大統領に関するスキャンダルを暴露する本を企画するときにそうなのであるが、ただ、それだけではない。実話であれ虚構であれ、我々が手に取るあらゆる本や物語がそういう側面を持っており、もはや現代では、そうでないと本にならないのだと言う。それは、書物というものが「その人」を消費するものだからなのである。

これは、人の商品化である以上、加工を経た上ではあるが人身売買ということになる。人身を直接に売買することは人権の侵害を免れないし、個人情報売買は公式には禁じられているし、美や性の商品化は不適切なものとして非難され、広場やネット上で盛んなフリーマーケットでも倫理的な観点から売ってはいけないものが必ず指定される現代ではあるが、そんなことはお構いなしに、人を切り売りすることが文学という場では実のところ横行しているのだ。

ただし、その際の大前提となっているのが人間のテキスト化という過程である。近代化を迎えた社会では個人個人がテキスト化されて管理・把握されるようになっており、どこかの誰かしらであり得た存在が、人物事典

や、町に役所、学校、警察とあらゆる場所では有名無名を問わずデータベース化され、属性とともに整理され、リストとして把握されるようになった。そうすると、人は、今度は逆にそのテキスト化された属性から、どんな存在であるかを把握されることになる。つまり、「どこそこという土地のこれこれという家を出自に持つ誰々」、「どこそこの学校を出た誰々」、「どこそこの会社に通う誰々」、「何々を所有している誰々」というテキスト化された属性から定義される人という存在に我々はなり、その延長として、「この車に乗っているあの人」、「どこそこというレアな土地に旅行している男性」、「どれそれという美術館に足を運んだ若者」、「このフラベチーノと写真を撮って拡散するあの人」といったものがSNSで発信されて、そこから定義される自分を定着させる現代に、話はそのままつながっていく。それは広い意味での文学の行き着く一つの結果であり、服装や図像や動画をも含めたテキストで自己を定義しつつ、定義された自己を切り売りすることを日々、反復しているのである。見渡せば、自分語りの声を毎日聞かされて生きる現代の我々なのである。どの人も匿名ではあり得ず、IPその他のIDで紐付けされた上で情報を発信している。本書では実に何度も繰り返される言葉が、アイデンティティの「テキスト化」と「商品化」なのであるが、実に本書は近代の誰にも漏れずに訪れた人間のテキスト化と商品化を、主に文学という題材を通じて問題にするのである。

他人に対して語るべきことがらを持つ人口も、識字人口も限られていた時代から、やがてみな等しく自身の情報を発信する者で満たされる世界が訪れ、素人の語り手であふれかえる現代へと至る、その最初の兆しを報告したのは、筆者によれば、1827年の『クウォーターリー・レビュー』に掲載されたジョン・ロックハート (John Gibson Lockhart; 1794-1854) による文章だと言う。つまり、それまでは自分について語ることなどとは無縁だった商売人や政治運動家までが回想録を出版し、果ては大衆扇動家に、船乗りや、音楽演奏家と、猫も杓子も自らの人生を発表し始めている、あるいはそうした人物についての伝記が書かれていると言うのだ。見るべき才能もなく、人に知られている名士というわけでもないのに、我こそは19世紀のギルピン (William Gilpin) 気取りで自らの人生を公開する人々が絶えないのは社会の病理なのであるとまで言っていて、その辛辣さはなかなか

のものだ。さらには、もっとはっきりと「中産階級による自伝」と呼んでしまうのだが、この増殖によって芸術はいよいよ「破産」を迎えたのだと評している。そして、筆者はこのロックハートに、それ以前とそれ以後の文学、あるいは社会における人間の存在の仕方の分水嶺を見て、これを軸に置いて話を進めるのである。

ラテン語から解放されて各国語・各地方言語で文学を綴るようになったことが一つのきっかけとなって欧州にルネサンスが花開いたように、中産階級やもっと下々の者まで自ら語る主体や、他に語られる対象になることで、それまでは聞けなかった物語が聞けるようになったことを思えば、それだけその脇には読むに値しないゴミのようなテキストの山が何百倍と積みまれようとも、何もロックハートのようにこの動きを低俗な時代だと毛嫌いするにも当たらないかもしれない。この動きを歓迎するかしないかは置くとして、大きなスケールで捉えたときのこうした時代傾向の指摘というのは、本書で最も注目に値するものかと思う。

また、本書のもう一つの大きな意義は、19世紀の出版状況を考察の対象にしている点である。第1章の出版産業に見る自伝の出版傾向の変遷は極めて興味深く、その1820年代から1850年代に至る精緻な分析から分かるのは、ただ単純に19世紀を通じて自伝の類いの出版が純増していったわけでもなければ、最初から「自伝」と銘打って出版される傾向があったわけでもなかったことである。この点を実証的な方法で明らかにしてくれるという意味で、この時代の出版文化を扱った多くの研究書の中でも大いに有意義なものであると言っていいたいと思う。それには、膨大な読書量、調査量が背景となっていることは間違いない。

ただ、その第1章の1820年代から1850年代に至る出版の分析は、その後の終章まですべての章で論じる1860年代の小説の分析の前段として用意されているものであるのだが、肝心のその1860年代の小説の分析はそこまで興味を引かなかった。ざっくりと「19世紀の」とか「ヴィクトリア朝時代の」と区切った研究が多い中で1860年代の10年間に特化した研究それ自体は非常に細やかにして重要なものであるとは思うのだが、ほとんど言うべきことは第1章で尽きているという印象を持たざるを得なかった。第2章の『大いなる遺産』論ではピップという人物を、移動や交換が可能な人

間の商品化の典型として説明するのは、まさに第1章で展開された説明を一つの小説という具体例にはめていく作業である。第3章ではその応用として、女性の身体の性的な商品化の話が展開されるのであるけれど、問題は、読めば読むほどそこで扱われている『レイディ・オードリーの秘密』が適切な例示でないことが浮かび上がってしまうことであつたりする。この小説を読めば分かるのだが、センセーション小説であり、女性が主人公であり、その性にまつわる事情に起因して数奇な運命を生きるし、その素性が問題にされることになる小説でもあるけれど、しかし決してここで言われるような性の商品化という説明がしっくりくるような小説ではないのである。第4章ではエリオットの『サイラス・マーナー』とリードの『ハード・キャッシュ』の比較が行われるのだが、この二作を比較することの意義深さが分かっていながら比較の際にそこにはあまり目を向けないので残念ながら有意義な比較が展開されないという問題があるのだが、それよりも、例えばエビーが経済的価値の交換対象なのであるという、この小説を読んだらたいがいの人が最初に行き着く感想のようなどころへ結論がいつてしまうことが残念である。そして、第5章ではディケンズの小説『互いの友』を例に世界がすべて商品化された結果としてのゴミの山を指摘し、その商品化の傾向から誰も逃れ得ないのだという、だいたい以前にはかたきさん聞いたことがあるこの世の閉塞感を違う言葉で語られる格好になり、第6章ではコリンズの小説『月長石』を例に、秘められた自己の暴露を論じて、また人間のテキスト化と商品化に話は戻ってくる。終章では、要は、人は交換可能な金銭的な価値に回収されたのであるという、序章の中で分かっていたことが結論として改めて提示されてしまう。

では、この研究書は、書かれなくてよかった本なのかということやそうでもなくて、第1章に展開される内容を、筆者がどうも苦手としているらしい小説の分析という方法で実証しようとしたところに問題があったように思われてならない。

そして、このことは、たとえこの筆者が仮に小説分析を得意としていたとしても指摘されてしかるべき問題だと私が思うのは、なぜ、ここまで精緻に第1章で考察していた自伝による自己表象の問題を、後の章で小説という虚構を題材に展開していつてしまったのかという疑問が残るからなの

である。第1章でロックハートが批判しているのも、本書の著者が出版文化の中で問題にしているのも、自伝、回想録、手紙、日記、伝記、本の序につけられた自分語りといった、すべてはノンフィクションとしての自己表象なのである。ところがそれを具体的な例の中で論じる段になって小説に題材を求めるのはなぜなのだろうか。第1章以降、ノンフィクションとして書かれた自伝や伝記を直接に分析対象としてはいけなかったのだろうか。たしかに虚構作品の中でしか描き得ないことがらや、虚構作品を題材にしなければ論じ得ない批評というものがあり、ほかにない独特のモデルというものを虚構作品は往々にして用意してくれるものとは思うけれど、その必要がなくともノンフィクションよりもフィクションが文学批評の素材になってしまいがちなのは、ここからは推測ということになるのだが、それが研究の分野として確立し定着しているからで、ノンフィクションのテキストよりもフィクションのテキストの方が過去に論じる対象となってきた経験を持つからということがその理由なのではないだろうか。そして、こうした現実世界や現実の歴史に対して興味を抱きながら、あまり意味を考えないままに、それが虚構の分析に接続されていってしまうタイプの研究というのは意外に多いのではないかと思ひ至るのである。そして、あまりこういうことが繰り返されると、「なぜ現実にもありもしない作り話を書いた本を読んだり考察したりする趣味のような営みを学問という名の下に実践するような学部や学科が平気で存在しているんですか」という、答えるのに相当面倒くさい問いが投げかけられ続けてしまうということもあるのである。やはり、小説を論じるのは、小説を論じる必要があるときだけに限ることも、一つの良識なのではないだろうか。

—中央大学教授